会話記録を活用したスーパービジョンの可能性

－スーパーバイジーのふりかえりと気づき－

○　新見公立大学　　小松尾　京子（会員番号 4895）

キーワード：スーパービジョン・会話記録・スーパーバイジー

１．研 究 目 的

スーパービジョンは、専門職の成長とクライエントへの援助の向上をめざすことを目的としている。その定義や機能は時代背景等により強調される部分は異なるが、スーパーバイザーとスーパーバイジーの相互のやり取りの中で、スーパーバイジーが自ら気づき成長する、専門職養成のための方法でありプロセスであることは多くの研究者で一致している。スーパーバイジーが成長するためには、実践のふりかえりが欠かせない。Schön が提唱した「省察的実践家」の専門職モデルの影響もあり、スーパービジョンにおいては「気づきを促す」ことが強調されている。渡部（2007：3）は、自ら納得したときに応用可能で有用な学習をすることから、自ら思考するプロセスの重要性を指摘している。

一方で、スーパービジョンの展開の難しさもこれまでに指摘されてきた。スーパーバイジーの立場からは、何を言われるのか不安を感じたり、スーパーバイザーから言われたことを実行するのが難しいといった意見がある。スーパービジョンの方法は多様であるが、専門職の成長とクライエントへの援助の向上に資するためには、スーパービジョンとして成立していることについて、根拠をもって示す必要がある。

スーパービジョンの目的を達成することは、具体的なふりかえりと気づきによる成長の成果を実践に還元できることを意味する。援助場面で生じている交互作用を読み解くツールとして、会話記録がある（小松尾 2021）。スーパーバイジーとクライエントとのやりとりを逐語化することで、具体的で詳細なふりかえりをすることが可能になる。

本研究の目的は、会話記録を活用したスーパービジョンによるスーパーバイジーのふりかえりと気づきの内容を明らかにすることである。本研究で明らかにされた内容は、スーパーバイジーの成長を促すスーパービジョンの方法を検討する端緒になると考える。

２．研究の視点および方法

調査の対象は、自身の実践場面を会話記録として書き起こし、それを事例として取り扱うスーパービジョンを経験したスーパーバイジー８名である。半構造化面接による個別インタビューを実施した。分析方法は質的データ分析法（佐藤 2008）による分析手順を採用した。インタビューデータはすべて逐語録にしたうえで、意味が損なわれない程度に記述を区切って抜き出し（セグメント化）、抜き出したものにそれぞれ内容を説明したコードをつけた（オープンコーディング化）。いくつかのコードを言い表す抽象度の高いサブカテゴリ、さらに上位のカテゴリを生成した（焦点化コーディング）。生成されたコード

やカテゴリを繰り返し見直し、スーパービジョンの研究者とスーパービジョンの経験豊富な実践者に継続的に確認することで、分析結果の妥当性を確保している。

３．倫理的配慮

倫理的配慮として、調査対象者に研究の目的、方法、意義、匿名性の確保、結果の公表の方法等について説明し、研究協力への同意を得た。データに関しては、研究倫理に則り、個人が特定できないよう保管しプライバシーの保護には十分配慮している。本発表に関連して、開示すべき COI はない。なお、本研究は新見公立大学研究倫理委員会（承認番号：235）の承認を得ている。

４．研 究 結 果

インタビューによって得られたデータのうち、分析対象となった発話内容は 333 である。分析の結果、【ふりかえりのツールとしての会話記録】【可視化と焦点化】【スーパーバイザーとの関係性】【言語化への挑戦】【評価指標としての会話記録】の 5 つのカテゴリと２７のサブカテゴリを抽出した。

【ふりかえりのツールとしての会話記録】は、会話記録により日頃の実践をふりかえり、自分の実践の傾向に気づくプロセスを示している。【可視化と焦点化】は、会話記録を書き起こすことで、実践を可視化し、ふりかえりの焦点化を意味するカテゴリである。【スーパーバイザーとの関係性】は、スーパーバイザーからの問いかけから思考を深め、「わかってくれる人」というスーパーバイザーとの関係性を示すカテゴリである。【言語化への挑戦】は、会話記録を書く難しさを感じつつも、実践の言語化へのチャレンジを示すカテゴリである。【評価指標としての会話記録】は、実践力向上に向けた評価指標としての可能性を示すカテゴリである。

５．考 察

スーパーバイジーは、会話記録をとおして何度も繰り返し実践をふりかえり、自ら気づくとともに、スーパーバイザーからの問いかけにより、さらに省察し、気づきを深めていた。これは、スーパーバイザーは「わかってくれる人」という関係性が成立していることが、基盤になっていると考える。上から目線の関係性ではないことに加え、会話記録により具体的な場面に焦点化していることが、省察を可能にしていると考える。会話記録は実践場面を可視化し、スーパービジョンで取り扱うことでふりかえりの焦点化が可能になる。このことから実践を具体的に評価するツールとしての可能性が示唆された。

＊本研究は JSPS 科研費 23K01876 の助成を受けたものである。

【文献】

小松尾京子（2021）「介護支援専門員へのスーパービジョンに関する研究－現象学的アプローチからの試み－」『新見公立大学紀要』（42）47－54.

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法－原理・方法・実践』新曜社.

渡部律子（2007）『基礎から学ぶ気づきの事例検討会』中央法規.